



写真 1. 栄えゆく福生町駅前通り（現代）

第一章 概

説

現在、福生町は全国十四カ所にある米空軍基地の一つであることによって、横田の名と合せて広く国際的に知られていることはいうまでもない。一方、大太平洋戦争終結後十五年を経過した今日、街のあらゆる景観が戦前の様相を失いつつある。その結果、ともすれば町に住む者であつてさえも、この町が過去における、わが軍国時代はなやかなりし頃の空軍要地であつた事実さえも忘れ去られ行くのではないかとの感がある。しかし、戦後、この町に米軍基地が設置されたことは偶然の結果ではなく、かつて旧日本航空軍要地があつて、航空基地としての素地が基礎づけられていたからである。

今日、福生町は西多摩郡においては中心的存在にある。実にこの発展を見るに至ったことは、旧日本空軍要地に設定されたことによつた始まつたものとみて過言ではなからう。それが更に戦後、米軍基地として引継がれるに至つたことがその大きな要因であることは、人口の増加という一端を推量してみてもわかる通りである。すなわち、昭和二年の福生の男女合せての総人口は六、〇九二人であつた。それがその後やや数を増したとはいえ、昭和十四年、つまり空軍要地として土地の買収が始められた年は総人口六、八三三人で、この十二年間の人口増加はわずかに七四一人であつたが、昭和十五年の総人口は七、九二一人という急激な上昇を示すに至つたのである。このようにわずか一年間に、

しかもこの狭い土地で一、〇八八人という驚くべき人口増加である。この昭和十五年十一月十日に福生町として町制が施かれ、航空の町として新しく出発したのである。その後も、飛躍的な人口増加を示し、終戦の年の昭和二十年には総人口九、九一八人で、更に昭和三十四年に至っては二〇、三五五人とこれまた驚くべき増加で、この十四年間に倍を越す増加を示し今日に至ったのである。

福生町は、昭和十五年に町制の施行される前までは福生村・熊川村と分かれた村であって、組合役場をもって事務処理が行われていた。更に明治二十二年から同十七年に遡つての間は、福生村・熊川村・川崎村・五ノ神村・羽村の五カ村連合による、川崎村連合戸長役場に属していたのである。当時の村民の生業は農業を主とし、特に養蚕は郡下でも生産の多い土地として知られていた。

江戸時代には福生村・熊川村とも全くの独立村で、それぞれの領主に支配されていた。福生村は初め天領と私領の入合地で、代官と旗本によって支配されたこともあったが、後に至っては全村天領となり代官の支配下に変った。また、熊川村の場合も同様天領・私領の入合地であった。したがって代官ならびに田沢氏・長塩氏の旗本によって支配され、その間は長く幕末まで続いた。この点、福生村とは違ったようである。

中世においては、この土地から多くの板碑の発見されることなどから推察して、多くの武士の土着していた所ではなかったかと察せられる。そして滝山、戸倉の城主の支配下にあった。「太平記」に見ゆる石浜の合戦は日本史上有名なであり、この一帯が往時戦場と化した史実を知ることができる。

両村合せて、「福生郷」と呼ばれた時代もあったということから考えると、集落の発生は相当に古いと想像されるが、しかし福生の地名の起源については、いままで多くの学者の関心の的として研究され説かれたが、いまだ定説をみるに至っていない。福生の名が記された最も古い文献は、熊川の礼拝明神社の棟札に正長二年（一四二九）「蔵州多

東郡福生郷」と記銘されていることや瑞穂町の阿豆佐美神社の文明十四年四月（二四八二）の棟札に「神主宮崎右衛門、大工多摩郡福生村住人孫五郎定仗」と記された資料が見られる。

古代にあっては隣接する秋多町内の大塚・瀬戸岡を中心として栄えた豪族の支配下におかれたのではないかと推考される。

なお、原始時代には町内の至る処から縄文文化の遺物が数多く発見されたことからして、人の住んでいた土地であることが明確である。四・五千年の昔あるいはそれ以前、すでにこの土地にわれわれの祖先は住み着いたのである。

現在の福生町は前述の通り、短い年月に急激に発展した新興都市であるが、この土地に人間が住み着き、歩んで来たその歴史は他の土地に劣らず長く、日本の歴史と共に一歩、一歩きずかれたのである。

福生誌編纂の意義は、昭和の「新編武蔵風土記稿」福生の部を作るにあり、併せて今日まで発展するに至った歴史についても、福生の土地に関する史実に基き忠実に述べて、福生町将来の文化の発展に貢献すべき一端として始められたのである。しかしそれらの欠陥は、今後新しく育つ者の手によって補正、改編されるべきを願う次第である。

ともあれ、福生町制が施かれ、ここに二十周年を迎えたに当り、拙いながら福生町誌の成ったことは意義深いことである。

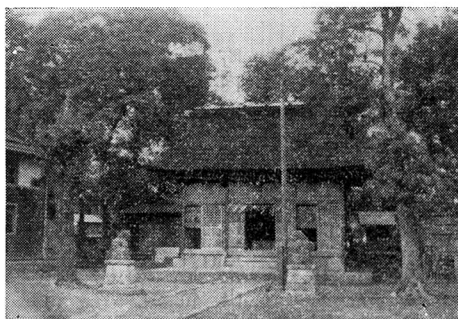


写真 2. 熊川神社（礼拝大明神）
（正長2年の棟札所蔵）